

鴻 koh

月刊俳句誌

令和4年8月1日発行

(毎月1部1日発行)

第17巻第2号 通巻195号

9 月号

2022



近江はも真菰刈る音が風の詩

歩を止めよ進めよ水鶏鳴きをれば

郭公に己が鼓動を重ねけり

ほととぎす一氣に山の青くなる

こんもりと森とつぷりと油照り

詩ごころを大事に文字摺草の丘

花菖蒲これほど深き色となる

北国街道一と日氣儘に草の笛

鳴き砂といふ砂浜の土用風

七夕竹あるかなきかの雨となる

何はともあれ四万六千日の寺

白玉のぽかりと芙美子忌の夕べ

花擬宝珠一会の色と思ひけり

# 近江はも

主宰作品

増成栗人

# 片白草

副主宰作品

谷口摩耶

高窓を掠めるやうに夏燕

アカンサスに古代の気品ありにけり

今日もまた片白草を見にゆかむ

片白草俳句談義のカフェの椅子

冷房をつけて籠りて風邪ひいて

青芝や愛犬の名を呼んでみる

収穫はブルーベリーとミニトマト

通るたび向日葵に声かけて行く

藪枯らしの風にゆらめく蔓の先

くれなゐの朝顔一花咲きにけり

我家の近くにあるハーブガーデンに片白草とアカンサスを見  
つけました。片白草は半夏生草の別名です。半夏生は二十四節  
気の一つで、植物には草をつけます。ちょうど半夏の頃に新芽  
の半分が真っ白になる不思議な草です。アカンサスは茎がまっ  
すぐに伸び、一番上に薄紫の花をつけます。地中海沿岸に多く、  
古代ギリシャ・ローマの建築の柱の上部の文様に使われていま  
す。どちらも珍しい植物です。

# 俳 作品抄

## 同人選

傍らの一書はへっせ花は実に  
渡し守甚兵衛の碑の草いきれ  
時の記念日踏切の音の鳴りどほし  
烏瓜の花転生は考へず  
河骨の一花が静寂作りけり  
リラ冷えの日なり坂また坂の道  
一夜酒男の子ばかりを育て来し  
薄切りのチーズの塩味夏至がくる  
雅なるときの短き白牡丹  
梅雨晴間日本橋にてオムライス  
日捲りで鶴折り太宰治の忌

佐藤あさ子  
横尾かな  
相川健  
山崎正子  
横山光榮  
北原沙織  
五十嵐敏子  
祐森司  
大沼経子  
山岸明子  
水谷はや子

増成栗人 選

## 会員選

着流しで薩摩切子と冷奴  
走り梅雨つんとレコード屋の匂ひ  
滴りて鍾乳洞にある時空  
紙飛行機ひらりと初夏の風となる

北城美佐  
鈴木崇  
藤原明美  
山内宏子

ダリの絵の中に居るらし昼寝覚  
半夏生止まつたままの古時計  
糠床の手入れ愉しき薄暑かな  
ハンカチをささつと濯ぎ旅の空  
新樹光猫を保護するボランティア

菊池ひろ子  
野村昌代  
綾戸五十枝  
深川峰子  
村上栄子

谷口摩耶 選

「曼」は「広く長い、きめが細かい、果てしが無い」などの意味を持つ漢字で、「曼延」「曼辞」や仏教用語である「曼陀羅」などの熟語があるが、何と言っても俳人に馴染み深いのは、秋の季語「曼珠沙華」である。王冠のような真っ赤な花で、またの名を「彼岸花」というように、秋彼岸の頃に咲く。葉を付けずに咲くことが葉枯れ（はかれ）に通じ、別れの花として「死人花」とも称される。

いつまでも見詰められるて曼珠沙華 吉田鴻司

# 曼

● 特集



## 俳句に詠まれた曼

荒井一代

曼珠沙華とはやまぐにの風の色 増成栗人

「曼珠沙華」は天界に咲くという赤い花を表わす梵語。俳句では「曼」がつく唯一の季語である。田の畦や人家のそこに咲く花は穏やかに美しく里山の彩りとなる。

西国の畦曼珠沙華曼珠沙華	森 澄雄
出雲路の雲紡ぐかな曼珠沙華	吉田鴻司
九十九里の一天曇り曼珠沙華	加藤楸邨
木曾を出て伊吹日和や曼珠沙華	河東碧梧桐
曼珠沙華御油赤坂をつらねたる	森田 峠
野仏の糸引くお目や曼珠沙華	野村喜舟

中国からの帰化植物で日本全土に分布し古くから暮らした旅にと数多く詠まれている。それぞれの地で、まるで浄土を思わせる幻想的な景として花は群れ咲いていたのだろう。

曼珠沙華不思議は茎のみどりかな	長谷川双魚
つきぬけて天上の紺曼珠沙華	山口誓子
仏よか痩せて哀れや曼珠沙華	夏目漱石

不思議なほど、そう唐突に花茎を立てて花は咲く。秋の澄みきった空はどこまでも高く、空の青と地の赤

の対比の美しさは一茎の細さに力強ささえ感じる。そして哀れと語りかける心情に秋の彼岸が重なる。

曼珠沙華どれも腹出し秩父の子	金子兜太
柚が子の摘みあつめある曼珠沙華	原 石鼎
曼珠沙華咲いてここがわたしの寝るところ	種田山頭火

捨てきれぬものにふるさと曼珠沙華 鈴木真砂女  
純朴な子達のほほえましい光景は、曼珠沙華の傍らで無垢の明るさを放つ。どこに居ても思いを寄せる故郷はやさしさに包まれて。

天国は知る人ばかり曼珠沙華	角川源義
ひとり往けひとりかなしめ曼珠沙華	黒田杏子
寂光といふあらば見せよ曼珠沙華	細見綾子
その奥に黒が兆して曼珠沙華	能村研三
曼珠沙華抱くほどとれど母恋し	中村汀女

この世とあの世の境界にいるような思いは曼珠沙華の色や姿にいい知れぬ妖しさや畏れすら感じるからか。曼珠沙華という甘くもやわらかい響きに比べ、別名彼岸花には寂しさが伴うように感じる。

祖先を敬い亡くなった人達を偲ぶ「お彼岸」。今年も父祖の墓参りに、火が走るような曼珠沙華の風景を眺めては誰彼と遠くに逝ってしまつた人の声を出しことだろう。

曼珠沙華以下省略の茎ありぬ 後藤兼志

## 曼珠沙華以下省略の茎ありぬ

後藤兼志  
西條弘子

作者は「鴻」の前同人会長、平成二十五年二月逝去、享年六十五。

掲句は没後、「はなのま句会」が『後藤兼志全句集』として編まれた「風」の章に収められたもの。この句を見つけて以下省略の茎に思わず共感し納得してしまっただけ。曼珠沙華をこの一言で言い切っていて見事である。兼志氏は小さな生物や自然をよく観察され飾らない言葉であっさりと言っている。俳諧味のある句が多く楽しい。

兼志氏とは「鴻」の全国大会でお目にかかるだけの遠い人でしたが、第五回東京大会の折、本郷菊坂、旧文士町界隈の吟行時に親しく話しかけていただいた。大会句集の表紙に書かれた建物がここにあり、樋口一葉の通った笹屋の蔵がこゝと一緒を歩い

# 曼の一句

「曼」——特集

「曼」を詠んだ自分の俳句、または「曼」が詠まれた愛語の句と、その句についてのエピソードや、俳句のなかでの「曼」について語っていただきました。

立療養所栗生楽泉園に入園、間もなく新薬プロミンで治療が可能になる。一九五五年、プロミンの副作用で片目が見えなくなり、一九七〇年全盲となる。

秋晴れの清々しい日、天を仰ぐと、かつて目が見えていた時に見た、真っ赤な曼珠沙華がありと心の中いっしょに見えた。きつと化石は実際よりもっと美化された景色を見ていたのではないだろうか。

紫綬褒章はじめ数々の賞を受けた化石の句は人の心を打ち励ます力となった。

二〇一四年栗生楽泉園で九十一歳で亡くなるまで、六十年ぶりにただ一度、故郷の句碑の除幕式に帰っただけであった。

## つよぬけて天上の紺曼珠沙華

山口誓子  
伊藤眞代

山口誓子は高濱虚子に師事している。大正十一年、初めて虚子に会い、俳号を、誓子「ちかひこ」から誓子「せごし」と改めた。

昭和初期、水原秋櫻子、高野素十、阿波野青歌とともに、「ホトトギス」の四Sと称された。のちに水原秋櫻子に従い離脱。秋櫻子とともに、新興俳句運動の指導的存在となる。

秋の澄みきった空気が、空は高くても高く青い。何も邪魔するものがない高い空なので紺と読んだのか、それとも夕暮れ時の濃

くて下だった。この文を書くのに調べていたら私と同世代だったことが判り、今更になんか早世を悼む文章。

## 曼珠沙華在来線のために咲く

大牧広  
並河裕子

二〇一六年三月新青森駅—新函館北斗間は開業し、北海道にも新幹線がやってきました。

一方、北海道JRは赤字路線解消のため次々と在来線を廃止私も故郷までは、バスを乗り継いで行くことになりました。

掲句は、線路沿いの道に真っ赤に、それでいて寂しく咲く曼珠沙華を詠んでいます。下五の「ために咲く」に次々と廢線になっていく在来線への劣りと悲しみが表現されており、深く共感しました。

ちなみに、東北以北では、寒さに弱い植物といふことで、曼珠沙華の咲くを見ることは残念ながら出来ません。でもなぜか夏の道沿いに妖しく揺れる曼珠沙華が記憶に残っているのです。

## 天仰ぐとこ心眼に曼珠沙華

村越化石  
林未生

村越化石は一九三三年静岡県に生まれ、十八歳の時、ハンセン病を発病し旧制中学を退学、上京して治療に専念した。この時期に俳句と出会う。一九四二年結婚、国の隔離政策で妻とともに国

い色の空なのだろうか。青い空とおそろくは赤い曼珠沙華。清々しいほどに何もまやむずに伸びた茎。先端の雄しべ、雌しべは一本一本くっきりと見えることだろう。空の青、花の赤の色の対比もまたのことながら、曼珠沙華の無駄なものに、心を惹かれるのである。

## 仔狐が忘れていった曼珠沙華

坂本宮尾  
神野未友紀

新美南吉の生誕地、半田市の矢勝川に全長一、五キロメートルに渡って曼珠沙華が咲く堤がある。「こゝに狐の舞台になった堤である。ここで狐のこゝは自分と同じ境涯になった兵十に心を寄せ、その日から山で採れた栗や松茸を届けるが、兵十は気がすこゝんを撃つてしまふ。「こゝ、おまえだったのか。近くの権現さまに住んでいた狐は度々南吉の作品に登場する。「手ぶくろをかいに」では狐と知りながら手ぶくろを売ってくれた帽子屋に「人間はいいいものか」。と狐が吠へる。

曼珠沙華が人と動物、そして権現さまの世界を美しく結びつけてくれているよう。病気に何度も打ちのめされながらも書き続けた南吉の言葉は、今も感動を与え続けている。

ふるへあふ音又のびてく曼珠沙華 夏井いつき

異界との間に咲き、揺れ動く人の心を静かに慰めてくれる花である。

### 曼珠沙華

伊藤 隆

二年前の二月に結婚しました。その年の九月の中ごろに日展の作品提出を終え、ほっとしたところで、家内と一緒に家の近くを散歩しておりました。散歩しながら、提出した作品のなかに、ひょっとしたら誤字があったのではないかと、思い至りました。自分なりには多少納得していた作品だっただけに、その落ち

シヨート  
エッセイ



# 曼・アラカルト

年輩の方は、或いは記憶にあるかも知れない。

### 魅惑の花

山田ゆきこ

曼珠沙華。仏教に由来し「紅色の花」「天上の花」の意をもち、見る者の心を柔軟にするといわれる。艶やかな緋色が風に揺れる映像は、幻想的で「ソクツ」とする程美しい。「毒花」「地獄花」等々、「ソツ」とする別名も多く、独特な世界観が広がります。うな妖しさをもつ。美しさと妖しさを合わ

せもつこの二面性も又、魅力的である。厳寒の地では越冬できず、北海道には自生していないという。北限は秋田県までと。私自身、映像以外で目にした経験がなく、実際に手にした折には、あの蠱惑的な魅力に引き寄せられそうで、「チョッ」と怖い。是非、行ってみたいものである。

### 赤いランドマーク

藤原明美

小学生の頃、曼珠沙華は墓地近くに咲く無気味で不吉な花という印象だった。生葉の講義では、毒と薬の成分を持ち、アルツハイマー型認知症の成分でもあることを知ったが、不気味な印象のままだった。俳句に触れるようになった後に大きく変化し神秘的な印象に。

私の散歩コースの一つに斜面に燃えるような曼珠沙華が現れる場所がある。猫と話しながら休憩する場所。そして小さな富士が見える日はご褒美。暫くしてその茶虎の猫は元氣だったのに突然死んでしまった。あの世とこの世が繋がる時期、鮮やかな赤い花は天上からの良い目印になるのだろう。あそこに行けば、会えるかなと足を運ぶ。



## 羽音集

谷口摩耶 選



人声と瀬音頼りに螢追ふ  
手の湿り足の湿りや螢の夜  
霊峰を映し鎮もる植田かな  
ダリの絵の中に居るらし昼寝覚  
子規堂も資料も古りぬ花は葉に  
ほうたるを見せ合ふ君とてこあはせ  
濃あぢさゝる家庭文庫の開設日  
中指のささくれを剥きはたた神  
半夏生止まつたままの古時計  
刻止めよ夏の日暮の乳母車  
途中から後れて歩く夏帽子  
半切の紙のいろいろ花あやめ  
初夏の片方だけのイヤリング  
糠床の手入れ愉しき薄暑かな  
教会のステンドグラス麦の秋  
美容師の鋏の音や夏兆す  
鎌倉の鯉の押寿し雲の峰  
盆東風や二天門より馬車道へ  
ハンカチをささつと濯ぎ旅の空  
山ほどの神のゐる郷花蜜柑

船橋

菊池ひろ子

習志野

野村昌代

松戸

綾戸五十枝

習志野

深川峰子

# 茶庵閑話

虫丸



添削されたかたちを  
覚えること  
以上に  
選者がその  
かたちに  
添削しようと  
考えたことの  
意味を理解  
することが  
大切だと  
言われましたが  
……



「学びて  
思わざ  
れば則ち  
四（くわ）し」  
二千五百年  
前の孔子の  
言葉だけ  
どね  
学んだことに  
自分なりの考えが  
加わって  
はじめて  
本物に  
なる



俳句においても同じように  
その積み  
重ねから  
自分の文体が  
現れてくる  
それが俳句の個性に  
つながる  
のですね  
子白しの  
たまわく  
ですね  
……



中国  
四千年の  
料理の技に  
自分なりの工夫を  
重ね過ぎたみたいですよ

<http://www.haisi.com/koh/index.htm>